

島根県邑智郡瑞穂町
長尾原遺跡発掘調査報告書Ⅰ

住宅建設用地造成工事に伴う発掘調査

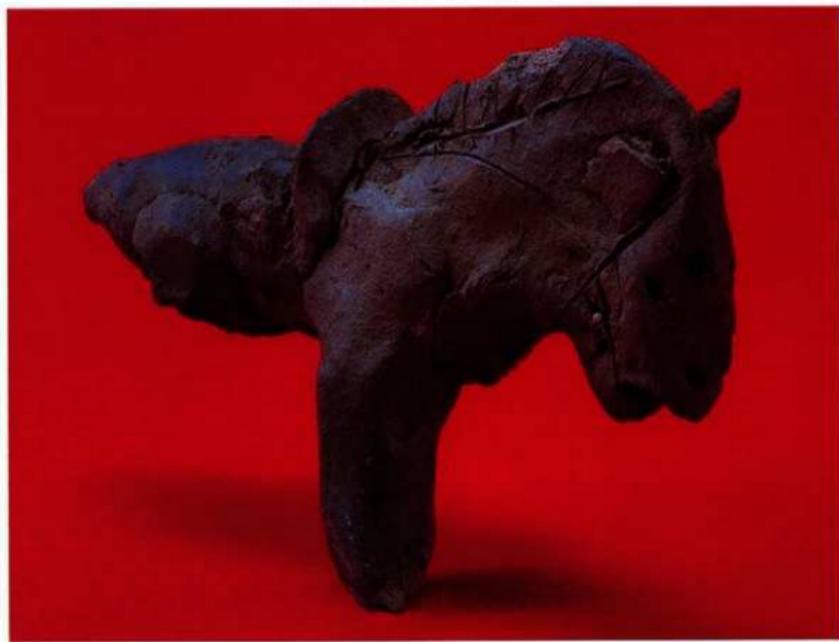


1994年3月

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会



馬形土製品（陶馬）（左側面）



同（右側面）

序

瑞穂町は遺跡の町といわれるよう、多くの埋蔵文化財が町内各地に点在しております。これらの貴重な文化財の保存保護、活用のため、分布調査や発掘調査を実施しているところであります。

この度、広島市に在住の中村昭夫氏の住宅建設にともない、建設予定地内の長尾原遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、石見地方で二例目の馬形土製品の出土をはじめ、弥生時代の住居跡など貴重な資料を得ることができました。この報告書は、その調査結果をまとめたものでありますが、広く各方面でご活用いただければ幸いであります。

なお、調査にあたりご指導いただいた広島大学文学部河瀬正利先生、島根県文化財保護指導委員吉川正氏、島根県教育委員会文化課をはじめ関係各位に深く感謝申し上げるとともに、積極的にご支援ご協力をいただいた中村昭夫氏ご夫妻に感謝と敬意を表する次第であります。

平成6年3月

瑞穂町教育委員会

教育長 澤 田 隆 之

例　　言

1. 本書は鳥取県邑智郡瑞穂町大字淀原802-6番地における住宅建設用地造成工事に伴い、平成5年10月1日から10月31日にわたって実施した長尾原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は広島市在住の中村昭夫氏から委託を受け瑞穂町教育委員会が実施した。
3. 本報告書の執筆は河瀬正利氏の指導で、森岡弘典、藤田陸弘が行い、文責は日次および文末に記した。
4. 本書の編集は森岡弘典、藤田陸弘が協議し行った。
5. 本書掲載の図面作成は森岡弘典、藤田陸弘及び上木和枝、石橋貴美子が行った。
6. 本書掲載の遺構写真撮影は森岡弘典、藤田陸弘が行い、遺物写真撮影は古川健二が行った。
7. 本書掲載の地図は建設省国土地理院発行の承認を得て同院発行の25,000分の1を複製した瑞穂町管内図を使用したものである。
8. 本文中使用する遺構記号は、SI(堅穴住居跡)、P(柱穴)、SK(土坑)である。
9. 本書掲載の地形測量図、遺構実測図の矢印は磁北を示している。
10. 出土遺物は瑞穂町教育委員会で保管している。

島根県邑智郡瑞穂町

長尾原遺跡発掘調査報告書 I

目 次

序

頁

I. 調査に至る経緯	1 (森岡)
II. 長尾原遺跡の位置と環境	3 (藤川)
III. 調査区の概要と出土遺物	7 (藤川)
IV. ま と め	18 (森岡)

図版目次

- 図版 1 a. 長尾原遺跡遠景 b. 同近景
図版 2 a. 長尾原遺跡土層断面 b. 同
図版 3 a. 長尾原遺跡土層断面 b. 同
図版 4 a. S I 01検出状況 b. 同遺物出土状況
図版 5 a. S I 01 b. S K 01
図版 6 a. S K 02 b. ピット
図版 7 S I 01出土遺物
図版 8 包含層出土遺物
図版 9 a. 馬形土製品(陶馬)出土状況 b. 同
図版 10 a. 馬形土製品(陶馬) b. 同
図版 11 a. 馬形土製品(陶馬) b. 同
図版 12 a. 馬形土製品(陶馬) b. 同
図版 13 a. 馬形土製品(陶馬) b. 発掘調査状況

挿図目次

	頁
第1図 瑞穂町域と長尾原遺跡位置図	2
第2図 長尾原遺跡周辺の遺跡分布図	6
第3図 調査区位図	7
第4図 長尾原遺跡調査区土層断面図	8
第5図 遺構配置図	8
第6図 S I 01実測図	10
第7図 S K 01実測図	10
第8図 S K 02実測図	10
第9図 ピット実測図	11
第10図 遺構に伴う遺物実測図	12
第11図 繩文土器実測図	12
第12図 弥生上器実測図	14
第13図 須恵器実測図	15
第14図 上師質土器実測図	15
第15図 馬形土製品(陶馬)実測図	16
第16図 石製品実測図	17
第17図 道域住居址実測図	18
第18図 美保神社境内遺跡出土土馬	20

表目次

表 1 土坑規模	9
表 2 ピット計測表	9

I. 調査に至る経緯

長尾原遺跡は、島根県邑智郡瑞穂町大字淀原802-6番地周辺に所在する弥生時代から平安時代にいたる大規模な集落跡である。

遺跡の発見は、第二次世界大戦後この丘陵一体の山林を切り開いて新田や畠地を開発した際に多量の土器などの遺物が出土したことによる。

今回調査を行った場所は本遺跡の東端に位置し、瑞穂町役場から1.3kmの地点にあり、町道淀原馬場線を挟んで南側には瑞穂中学校がある。また、本調査区の北約50mでは、1975年（昭和50年）の発掘調査で弥生時代の住居跡や遺物が検出されている。

ところで、広島市に在住されている中村昭夫氏より、住宅建設に伴い本遺跡の取扱について平成5年4月に協議を受けた。中村氏によると、現在の住宅が土地区画整理事業のため立ち退きになるので、これを契機に、氏所有の現在地に住宅を建設し転居したいとの事であった。瑞穂町教育委員会は島根県文化課と連絡を取りながら協議した結果、立ち退きによる住宅建設であるので、早急に調査を実施しなければならないとの結論に達した。しかし瑞穂町教育委員会では他の遺跡の発掘調査を実施中であったので、ただちに調査に着手することが困難であった。このため中村氏と協議を行った結果、発掘中の調査が一段落する秋季に調査を実施することで了解を得、平成5年10月1日から10月31日にわたり次の調査体制で実施した。

調査主体 瑞穂町教育委員会

調査員 森岡弘典（瑞穂町教育委員会文化財係長）

調査補助員 藤田睦弘（瑞穂町教育委員会主事）

調査指導 河瀬正利（広島大学文学部助教授）

吉川 正（島根県文化財保護指導委員）

川原和人（島根県文化課主幹）

熱田貴保（島根県文化課主事）

- 事務局 澤田隆之（瑞穂町教育委員会教育長）
 山本忠徳（瑞穂町教育委員会教育課長）
 星野暢子（瑞穂町教育委員会課長補佐）
 佐藤 勝（瑞穂町教育委員会課長補佐）
- 発掘作業 石川義明、井坂積子、上川義夫、上田民子、漆谷 勉、大畠義美、大畠清見、尾辻文江、上田弥生、国信勇之進、洲浜軍太郎、田中繁人、高川秀夫、戸津川孝夫、富永ナカヨ、平川正寅、日高スエノ、久光花枝、松島利郎、三上福三、三上 覚、森田ユキエ、山崎フジヨ、吉永久子
- 整理作業 上木和枝、石橋貴美子（瑞穂町教育委員会）

なお、また調査に当たって松本岩雄氏（島根県古代文化センター）、内山律雄氏、西尾克己氏、角田徳幸氏、守岡正司氏（以上島根県埋蔵文化財調査センター）、上井久夫氏（鹿子原虫送り踊り保存会）、桑野直夫氏、木邑徇氏、富永公美氏、山本史朗氏、三上憲昭氏、井坂猛氏、奥田真隆氏（以上瑞穂町文化財保護審議会委員）、原裕司氏（浜田市教育委員会）、振井久之氏（大和村教育委員会）、服部文明氏（石見町教育委員会）の方々から広範なご教示をいただいた。また、中村昭夫氏ご夫妻、日高弘治氏には、発掘調査を円滑に進めるため多くなご配慮とご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

（森岡弘典）



第1図 瑞穂町域と長尾原遺跡位置図

II. 長尾原遺跡の位置と環境

島根県邑智郡瑞穂町は、島根県のほぼ中央部の邑智郡南部に位置する。南西には中国脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。町域のほぼ中央を出羽川が東流し、その出羽川に向かって亀谷川、岩屋川、円の板川などの支流が注いでいる。出羽川とその支流の流域には、沖積地や河岸段丘が形成されており、特に瑞穂町田所から出羽にかけてはかなり広い出羽盆地が発達している。長尾原遺跡はその出羽盆地の南側の河岸段丘面に位置しており、弥生時代から歴史時代にわたる山間部ではまれにみる大遺跡として広く知られている。

今回報告する調査地点は、長尾原遺跡の最東端部に位置し、舌状にのびた段丘の突端部から南におよそ100mのところである。すぐ横を町道淀原馬場線が通り、その町道を挟んだ南側に瑞穂町立瑞穂中学校がある。

瑞穂町は遺跡分布調査がすでに終了しており、分布調査終了後に明らかになったものを含めて550カ所以上の遺跡が確認されている。その半数以上の約300カ所が製鉄関連遺跡であるが、横道遺跡をはじめとして旧石器時代から歴史時代にいたる幅広い時代の遺跡の存在が知られている。

旧石器時代の遺跡は、横道遺跡（高見）、荒槻遺跡（岩屋）及び堀田上遺跡（市木）の3カ所が知られている。横道遺跡からは始良Tn火山灰の下から流紋岩製の石核、剥片類が出土しており、荒槻遺跡では安山岩製の尖頭器状石器と削器が表面採取されている。⁽¹⁾また、堀田上遺跡からも流紋岩製のナイフ形石器、台形様石器及びスクレイバーなどが出土し、⁽²⁾約2万年以前から町域に入々が生活し始めたことを物語っている。

続く縄文時代の遺跡としては、横道遺跡、長尾原遺跡（第2図）、大畠遺跡（大草）及び大宇根遺跡（伏谷）が知られていたが、近年行われた中国横断自動車道広島浜田線建設に伴う発掘調査により新たに郷路橋遺跡（市木）、今佐屋山遺跡（市木）⁽⁵⁾、堀田上遺跡⁽⁶⁾の存在が明らかになった。このほか、1992年に調査された川ノ免遺跡（山田）⁽⁷⁾からも押型文土器が出土している。

横道遺跡からは縄文早期及び前期の土器や石器が出土している。また、長尾原遺跡では縄文早期の押型文土器が採集されている。さらに、郷路橋遺跡からは縄文前期とみられるトチの実貯蔵穴、縄文晩期ごろの住居状の遺構が検出されたほか、縄

文時代早期、前期、後期、晩期の土器や石器が出土している。⁽⁹⁾ 堀田上遺跡では縄文早期の竪穴住居跡が検出されたほか、押型文土器・石鐵・スクレイバー・磨石・四み石・石皿などが出土している。

弥生時代では、石堂遺跡（谷川）、川ノ免遺跡、淀原遺跡（淀原）、長尾原遺跡、順庵原遺跡（下龜谷）、野田西遺跡（上龜谷）、牛塚原遺跡（上龜谷）、堀田上遺跡などがある。

淀原遺跡、順庵原遺跡、牛塚原遺跡、堀田上遺跡からは弥生時代前期の土器が出土しており、山間地域でも弥生前期から農耕が始まっていたことを示している。弥生時代後半になると遺跡数も増加し、出土遺物も豊富になってくる。人口も増え、それを支える農耕も町域全域で広く行われていたと考えられる。こうして社会が安定し物質的に豊かになるに従い、弥生社会も階層分化していったのであろう。

そして、弥生時代終末期になると共同体の首長墓と考えられる順庵原1号墳墓（下龜谷）及び御華山墳墓（鱗渕）が築造される。順庵原1号墳墓は出羽川南側の河岸段丘上にあり、わが国で初めての四隅突出型墳墓の調査事例となった。墳墓の規模は縦10.75m、横8.25mの長方形で墳丘には川石が貼りつめられており、墳丘の四隅には幅1.25～1.50m、長さ2.0～2.25mの突出部が設けられている。また、埋葬施設は箱式石棺墓2基、木棺直葬墓1基で構成されており、主体内部及び周溝からガラス小玉、弥生土器などが出土している。さらに周溝内からは3個のストーンサークル状遺構が検出され、墳丘と平行して並べられている棒状列石とともにこの遺跡の特徴となっている。

御華山墳墓は出羽盆地の北側の河岸段丘上にあり、長尾原遺跡とは出羽川を挟んだ北側に位置している。この墳墓は封土がなく、縦2.8m、横1.3～1.5mの墓坑内に箱式石棺がつくられており、内には頭骨、上腕骨等が残っていた。

古墳時代の遺跡のうち、集落跡としては狼原遺跡（和田）、宇山遺跡（上原）、川ノ免遺跡、長尾原遺跡、順庵原遺跡、今佐屋山遺跡などがある。このうち、1968年に調査された長尾原遺跡からは竪穴住居跡や土坑墓が検出され、さらに鉄に関する遺構が発見された。また、1989年に調査された今佐屋山遺跡からも竪穴住居跡と製鉄遺構がみつかっており、製鉄・鍛冶が古墳時代後半には始まっていたことを示している。

古墳は20カ所以上確認されているが、その大部分は終末期に築造された小円墳と

横穴である。前半期の古墳と思われるのには段ノ原古墳（高見）、淀田古墳群（三日市）及び御華山古墳群がある。

このほか、古墳時代から奈良、平安時代にわたる須恵器の窯跡も数多く確認されている。久永古窯跡群はその代表的な遺跡で、18基以上の窯跡で構成されている島根県内有数の須恵器産地であったといえる。

中近世になると、山城や砦跡、そして多くの製鉄遺跡が確認されている。なかでも鎌倉時代に富永（出羽）氏が築城したと伝えられ、出羽盆地を北から見おろす二ツ山城は規模、構造とも県内では屈指の遺跡であり、瑞穂町のシンボルとして広く町民に知られている。

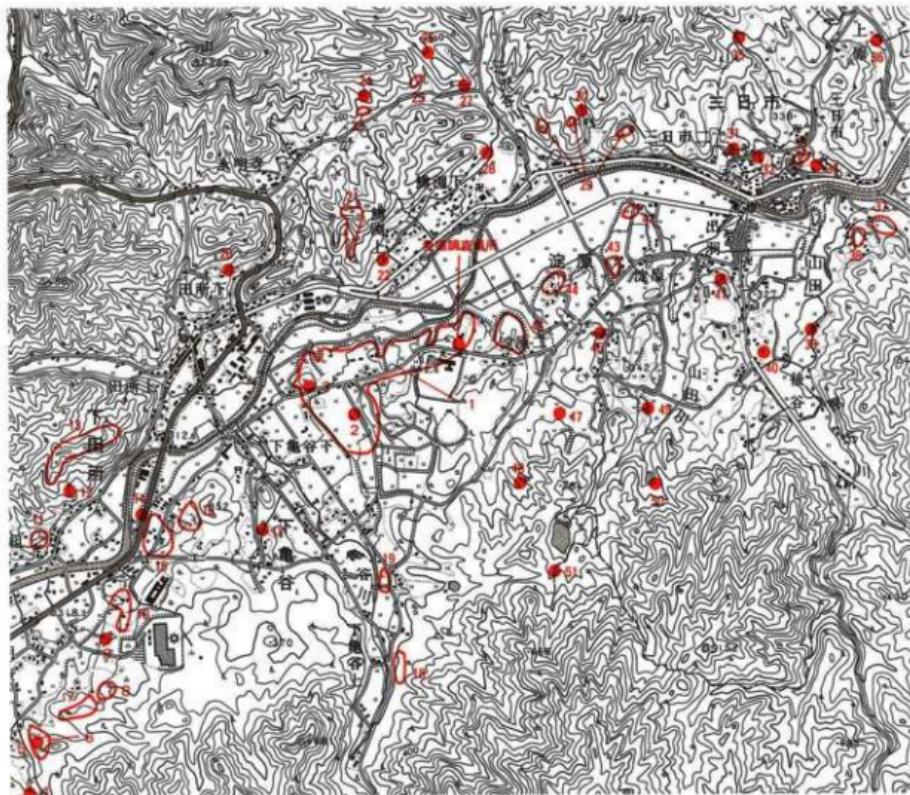
また、中近世の製鉄遺跡は300カ所近く確認され、製鉄が盛んに行われていたことをあらわしている。

(藤田睦弘)

注

- (1)瑞穂町教育委員会『機道遺跡－詳細分布報告－』1983年
- (2)吉川正『瑞穂町の遺跡』『瑞穂町誌』第3集 瑞穂町教育委員会 1976年
- (3)島根県教育委員会『主要地方道浜田八重可部旗特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 堤田上 今佐屋山 米屋山遺跡の調査』1991年3月
- (4)(2)と同じ
- (5)島根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 III』1991年3月
同上 IV 1992年3月
- (6)(3)と同じ
- (7)瑞穂町教育委員会『川ノ免遺跡発掘調査概要書』1992年6月
- (8)(1)と同じ
- (9)(5)と同じ
- (10)(2)、(3)と同じ
- (11)東森市良『四隅突出型墳丘墓』 ニューサイエンス社 1985年
- (12)瑞穂町教育委員会『御華山彌生式墳墓調査概要』1969年2月
- (13)島根県川本農林土木事務所『農免道路新設に伴う長尾原遺跡及長尾原一号墳調査概要』1969年2月
- (14)(5)と同じ

なお、上記参考文献以外に『瑞穂町誌』第1集、第2集及び第3集を参考にした。



第2図 長尾原遺跡周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|-----------|
| 1. 長尾原A遺跡 | 16. 順庵原A遺跡 | 31. 蛇池遺跡 | 44. 淀原遺跡 |
| 2. 長尾原B古墳 | 17. 牛市原遺跡 | 32. 楽聖寺原遺跡 | 45. 若林遺跡 |
| 3. 長尾原A古墳群 | 18. 杉谷古墳群 | 33. 宮ヶ谷遺跡 | 46. 淀原古墳 |
| 4. 大金谷遺跡 | 19. 杉谷遺跡 | 34. 七神社社務所裏 | 47. 江追横穴群 |
| 5. 牛塚古墳群 | 20. 増屋横穴 | 35. 横谷遺跡 | 48. 江追窓跡 |
| 6. 牛塚原遺跡 | 21. 御肅山古墳群 | 36. 宇山B遺跡 | 49. 沢陸遺跡 |
| 7. 野田西遺跡 | 22. 竹前遺跡 | 37. 滑遺跡 | 50. 渋ヶ谷窓跡 |
| 8. 野田遺跡 | 23. 清水ケ尻遺跡 | 38. 川ノ免遺跡 | 51. 後鉄穴窓跡 |
| 9. 正仏遺跡 | 24. 清水ケ尻窓跡 | 39. 小谷遺跡 | |
| 10. 出張遺跡 | 25. 馬場ヶ谷B遺跡 | 40. 鉄穴内遺跡 | |
| 11. 神宮遺跡 | 26. 馬場ヶ谷窓跡 | 41. 旅行村グラン | |
| 12. 南遺跡 | 27. 馬場ヶ谷A遺跡 | ド | |
| 13. 南古墳群 | 28. 原下遺跡 | 窓跡 | |
| 14. 順庵原古墳群 | 29. 淀田古墳群 | 42. 小糸堂遺跡 | |
| 15. 順庵原B遺跡 | 30. 石井追窓跡 | 43. オセド遺跡 | |

III. 調査区の概要と出土遺物

1. 調査区の概要

長尾原遺跡は昭和20年代からの開墾により広い範囲で旧地形が失われてしまっているが、今回調査を行った場所周辺は比較的良好に旧地形が残っている。本調査区は、長尾原遺跡の東端部に位置し町道淀原馬場線と小田昇一氏宅への進入路に隣接した山林である。また、調査区の南側は町道建設や土の採取のため地山が大きく掘りこまれており、今回の調査区とは約1mの段差があるが、その崖面に住居跡と思われる落ち込みが確認できた。

調査は住宅建築予定地及び進入路の全部について行うこととし、住宅建築予定地に15m×14mの調査区を設定し、さらに進入路予定地に幅6.5mの調査区を設定した。

土層断面をみると、住宅建築予定地部分は表土の下にやや厚く黒色土層が堆積し、その下に黒褐色土層があり地山へと続いている。表土及び黒色土層はほぼ平均して堆積しているが、黒褐色土層は所々途切れている。出土遺物の多くは黒色土層上面から出土した。また、調査終了後の地形図から観察されるように調査区の南西から北東に向かって浅い埋没谷があるようである。

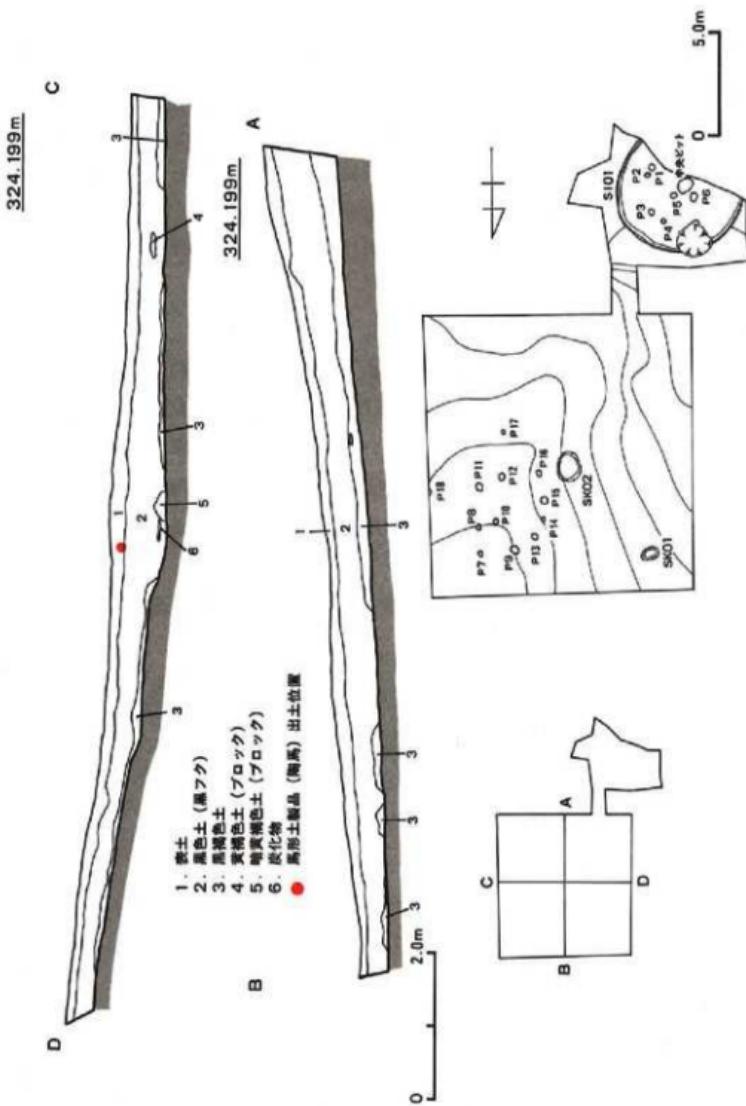
進入路予定地の表土のすぐ下から竪穴住居跡を確認した。伴出遺物から弥生時代のものと思われる。



第3図 調査区位置図

第4図 長尾原遺跡調査区土層断面図

第5図 造構配置図



2. 遺構及び出土遺物

今回の調査では弥生時代の竪穴住居跡を1棟検出したほか、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、石製品そして陶馬が出土した。しかし、出土遺物は非常に少なくコンテナ1箱に収まる程度である。

a. 遺構

SI-01

進入路予定地から検出した竪穴住居跡で、形状は直径約6.0mのほぼ円形と思われるが、土採取のため南側半分は破壊されている。側壁は4分の1程度が残り、住居跡内には黒色土が堆積していた。壁高は最も残りの良いところで20cm、壁の傾斜は約73度である。また、残存部分には幅7~25cm、深さ5cmの壁溝が残っており、破壊された部分についても同様の壁溝がめぐっていたと思われる。

床面はほぼ平坦で、床面上に焼土面を7ヶ所、ピットを7個検出した。中央ピットは径約60~80cm、深さ約30cmで、住居跡のはば中央部にある。P1は径約30cm、深さ約14cm、P2は径約20~30cm、深さ約52cm、P3は径約20~30cm、深さ約40cm、P4は径約20cm、深さ約40cm、P5は径約25~35cm、深さ約33cmそしてP6は径約30~45cm、深さ約13cmであった。

その他の遺構

今回の調査区からは土坑2基と12個のピットを検出した。土坑SK01は径約45~80cm、深さ約5~15cm、SK02は径約110~150cm、深さ約2~5cmの規模がある。いずれも略楕円形の平面を呈している。用途は明らかでない。(表1)

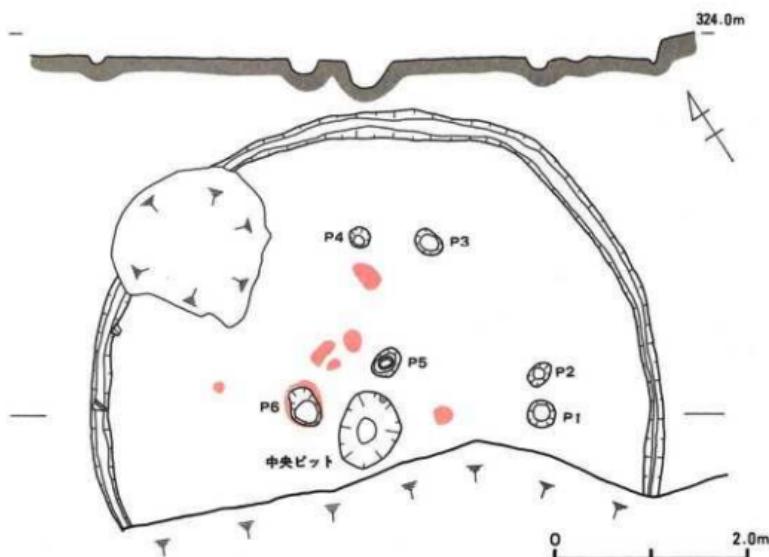
ピットは径20~25cmのものと30~40cmのものがある。建物に関した柱穴と推定されるものもあるがつながりは不規則で住居を復元することは困難である。(表2)

表1 土坑規模

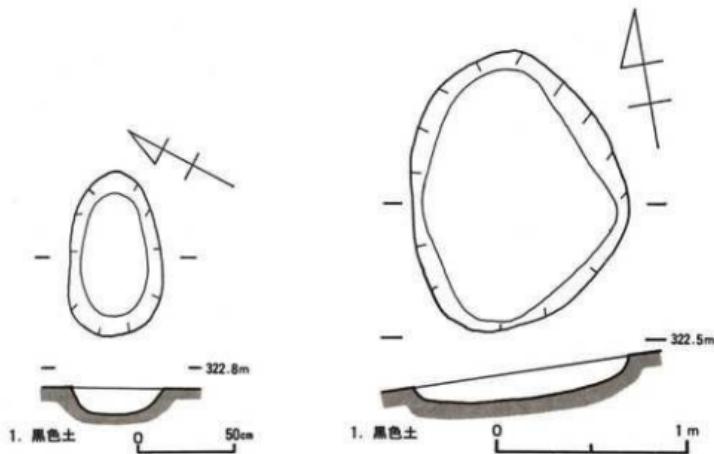
	径(cm)	深さ(cm)
SK01	45~80	5~15
SK02	110~150	2~5

表2 ピット計測表

	径(cm)	深さ(cm)
P7	25	66
P8	24	36
P9	40	40
P10	25~30	35
P11	34~42	60
P12	27	38
P13	30	60
P14	20	62
P15	34	55
P16	33	39
P17	16	26
P18	30	44

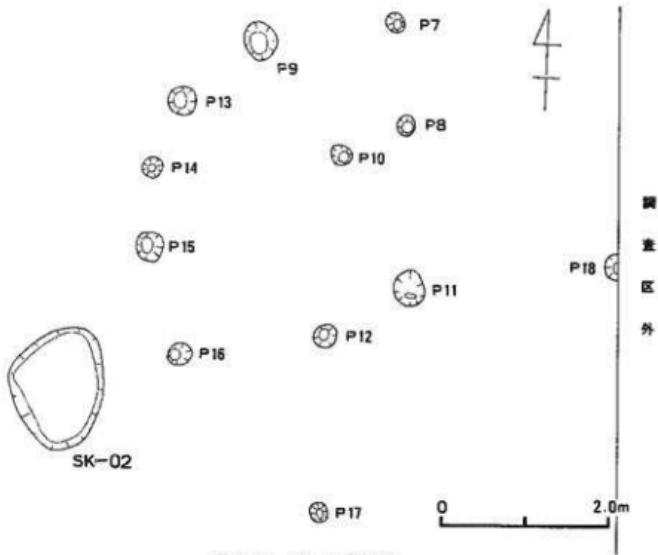


第6図 SI01実測図 (アミ目は焼土)



第7図 SK01実測図

第8図 SK02実測図



第8図 ピット実測図

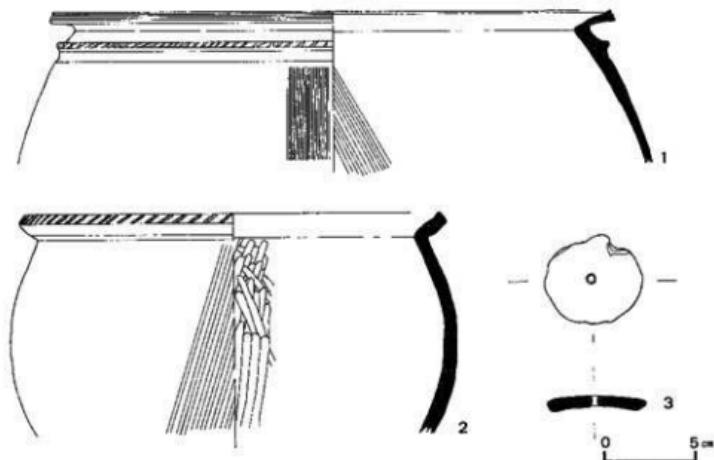
b. 造構に伴う遺物

豎穴住居跡の床面直上から33点の遺物が出土した。細片が多く完形品は無かったが、そのうちの3個について図示している。(第10図)

變形土器はいずれも口縁部が強く「く」字状に屈折している。

1は口径が30.4cmの大型の變形土器で、口縁端部がわずかに広がって平坦面を持ち、2条の回線または沈線文がめぐらされている。さらに、頸部には繩目状の突帯文が施され、そのすぐ下にヘラ状工具による施文がある。口縁部から外面頸部にかけてはヨコナデが施されており、胴部は内外面ともハケメ調整されている。内外面とも茶褐色を呈しているが、外面に付着物がありやや黒っぽくなっている部分がある。煮炊きに使われたものであろう。胎土は密で焼成も良好である。

2は口径が22.5cmで、口縁端部がわずかに厚く、その平坦面にはヘラ状工具により斜行刺突文が施されている。口縁部はヨコナデで調整され、胴部の調整は外面がハケメ内面はヘラミガキである。焼成も良好で内外面とも黄褐色を呈しているが、外面に付着物があり、その部分はやや黒っぽくなっている。



第10図 遺構に伴う遺物実測図

3は土器片を転用した紡錘車である。断面はやや湾曲し、形状は楕円形を呈し、長径5.3cm、短径4.7cm、厚さ0.5~0.6cm、孔径0.5cm、重量19gである。調整は不明であるが、焼成はややあまく、胎土に微粒砂を含む。色調は片面が淡黄茶褐色もう片面が褐色を呈している。

c. 包含層出土遺物について

前述の遺物のほかにも遺物包含層から若干の土器類が出土している。



第11図 繩文土器実測図

縄文土器（第11図）

破片であるため器種は不明であるが、表面に山形文が施されている。焼成はあまた1~3mm程度の粒砂を若干含み外面は暗褐色内面は暗黄褐色を呈している。縄文早期の押型文上器である。

弥生土器（第12図）

1は住居跡埋土中から出土した變形土器であるが、口縁部が欠落しており口径は不明である。口縁部は逆L字状になると推定され、胴部には若干の張り出しがみられる。外面は口縁部から頸部にかけてはヨコナデ、胴部にはハケメ調整されており、内面は頸部は調整不明であるが胴部はヘラミガキで調整されている。

2、3は高壺形土器である。2は口径が21cmあり、内外面ともナデ調整が施され、口縁端部が大きく広がって上部に平坦面をつくっている。さらにヘラもしくは布状のもので口縁部を際だたせ、その下に凹線が施されている。焼成はややあまく、胎土は密である。色調は内外面とも明褐色である。3は口径が14.5cmあり、口縁端部上面に平坦面がある。外面の調整は不明であるが、内面はナデ調整が施されている。焼成は良好で胎土は密である。色調は内面が明黒褐色、外面が明褐色である。

4、5は壺形土器である。4は口縁部が短く外反して立ち上がり、口縁端部が拡張して平坦面をつくっている。平坦部は内傾し3条の沈線または凹線文を有している。外面の頸部には1本の沈線文または凹線文が施され、その下の胴上半部にはヘラ状工具による2列の斜行刺突文があり、さらにその下には沈線文または2条の凹線文が施されている。内面の調整は、口縁部はヨコナデ、頸部はヘラミガキ、胴上半部はヘラケズリである。焼成は良好で、胎土は2mm程度の砂粒を含みやや荒い。色調は外面が黄褐色、内面は褐色である。5は口縁端部が拡張して平坦面をつくり、その平坦面は垂直に立ち2条の凹線文を有している。外面の調整は不明で、内面は口縁部から頸部にかけてナデ調整がされている。焼成はあまく、厚みにむらがある。胎土は2mm程度の粒砂を含んでおり、内面は明褐色である。

6は壺形土器であるが、口縁部が欠落してその形状は不明である。胴の張りは少く、外面頸部に施文原体の異なる2段の刺突文がある。内面は口縁部にヨコナデ、胴部にはヘラケズリ調整がなされている。

7は小型の壺形土器である。口径は12.5cmで外面はナデ調整、内面の口縁部はナデ、胴部はヘラケズリ調整が施されている。焼成はややあまく、最大で胎土は2mm程度の砂粒を含む。色調は内面が赤褐色、外面が明赤褐色である。

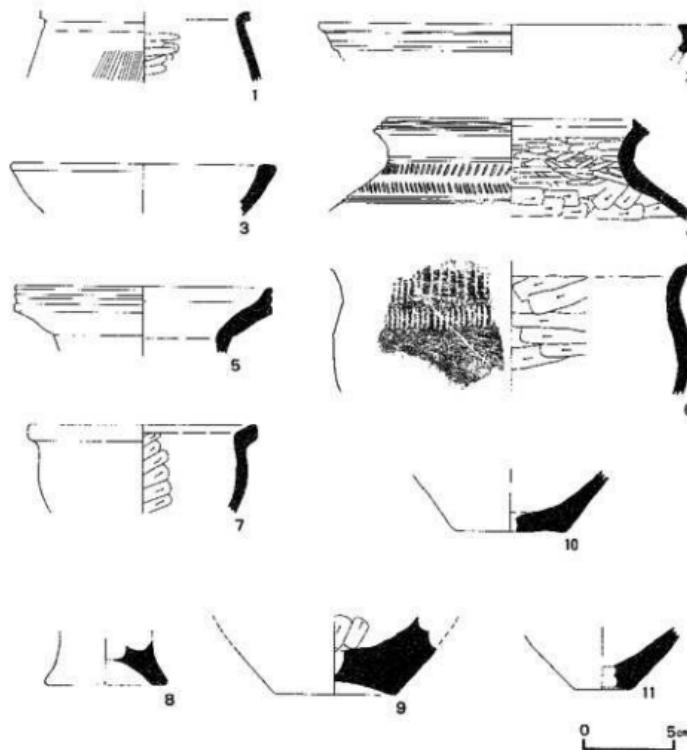
8は台付土器の台部である。底面の直径は6.5cmで中央付近で1.3cm凹んでいる。外面はやや外湾しながら立ち上がっている。調整は内外面ともヨコナデが施されている。焼成は良好で胎土も密である。色調は淡橙色である。

9、10及び11は土器の底部である。9は底面中央部付近で器厚が1.8cmとかなり厚く、大型の土器であったと思われる。底面は直径6.4cmで中央部は0.7cmほど凹んでいる。焼成はややあまく、胎土は最大2mmの砂粒を含み荒い。外面の調整は不明であるが、内面にはヘラケズリが施され、底面には指頭圧痕が残っている。色調は内面が赤褐色、外面が淡黄褐色である。10は、底面の直径6.0cmで若干の凹みはある。

るもののはば平底である。焼成はややあまく、胎土も1mm程度の砂粒を含みやや荒い。内外面とも調整は不明であるが、色調は内面が淡黄褐色で外面は赤褐色である。

11は、底面の直径が3cmであり、やや小ぶりの上器であったと思われる。焼成はややあまく、2mm程度の砂粒を含み胎土はやや荒い。調整は不明で、色調は内面が褐色、外面が黄赤褐色から赤褐色である。

時期は、1、2、3及び8が弥生時代中期、4、5、6、7、9、10及び11が弥生時代後期である。



第12図 弥生土器実測図

須恵器（第13図）

高環であり、胸部の上部と坏部の底部が残っている。坏部の底は平坦であり、口縁部は直線的に立ち上がっていたと推定される。脚部も直線的な形状をしており、透し窓が穿たれてる。当方では珍しい器形であり、瑞穂町周辺では出土例がない。調整は外面は回転ナデ、内面は回転ナデのほか一部で静止ナデが施されている。焼成は良好で胎土は密である。青灰色を呈している。年代については、類例がないため明確には分からぬが、古墳時代後期と推定される。

土師質土器（第14図）

中世の皿である。口径は8.7cm、残存高は1.5cmである。色調は、内外面とも黄褐色である。精製された粘土を用い、非常に丁寧に作られている。

外面は手づくねで整形し、口縁端部のみ回転ナデを施している。内面は布目压痕の上にナデ調整を行っている。内面に布目压痕が見られ、型によって整形されたと思われる。

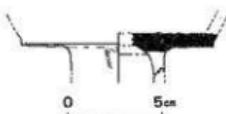
馬形土製品（陶馬）（第15図）

須恵質の陶馬が調査区のほぼ中央の黒色土層上面から出土した。尾の先、右前足を除く3本の足及び右耳を欠いており、現存長は13.9cm、胴部高は6.8cmである。

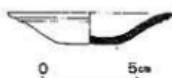
全体のうち頭部から胴部にかけては一塊の粘土で作っており、それに棒状の粘土を貼り付けて四肢としている。

顔面には棒状工具で6個の穴を開けている。そのうち側面中央部の2個は目を、正面下部の2個は鼻を表現していると思われるが、正面の2個については不明である。口部分は上顎の先端部が欠けているが、残存部分から判断してヘラ状工具で切り込んで表現していると考えられる。耳は粘土を貼り付けて表現しているが、右耳は上半分が折れている。また、頸部には鬚を沈線で表現している。

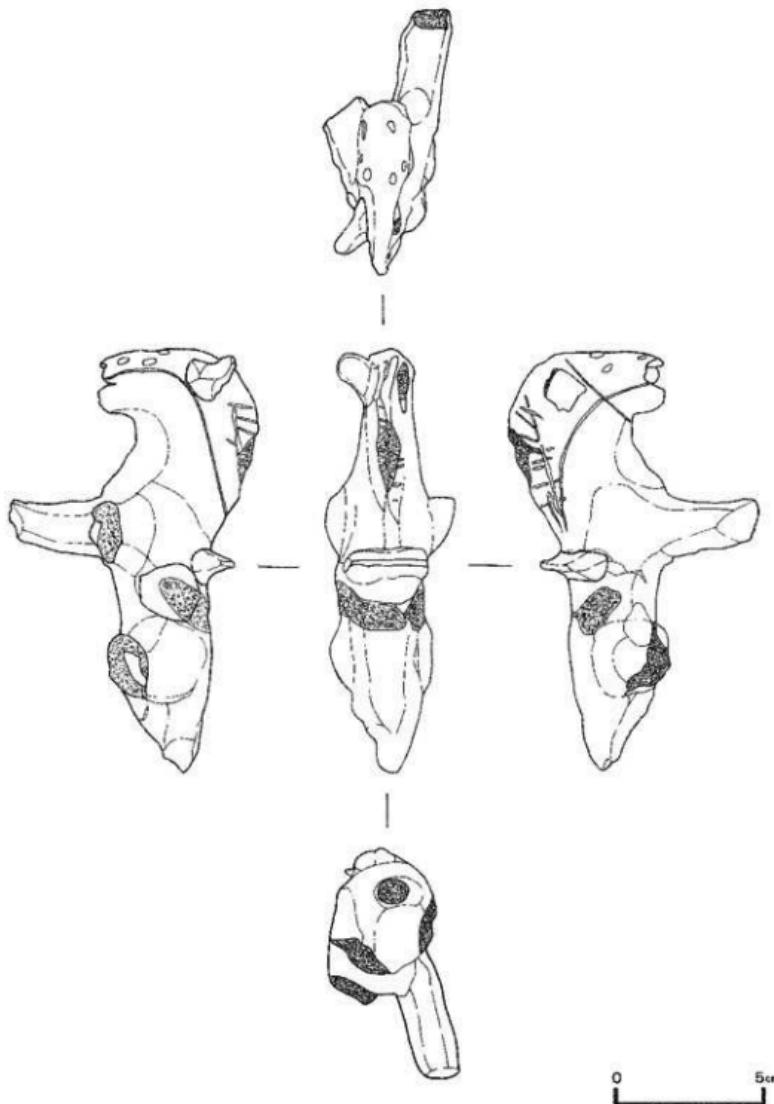
さらにこの陶馬には沈線と粘土の貼り付けによる装飾が施されている。頭部から頭部にかけての両面には1本の沈線で手綱を、頭部の右側面にも同じく1本の沈線で面繩を描いている。背部には粘土を貼り付けた後に指で整形して鞍をつくってい



第13図 須恵器実測図



第14図 土師質土器実測図



第15図 馬形土製品（陶馬）実測図

る。鞍の後輪は剥脱しているが、前輪には指頭圧痕がよく残っている。また胸部左側面の鞍の下には粘土を貼り付けて障泥をつくっているが、右側面については不明である。

全体的に陶馬の表面には指頭圧痕が多く残っており、丹念に指で整形したことがよくわかる。

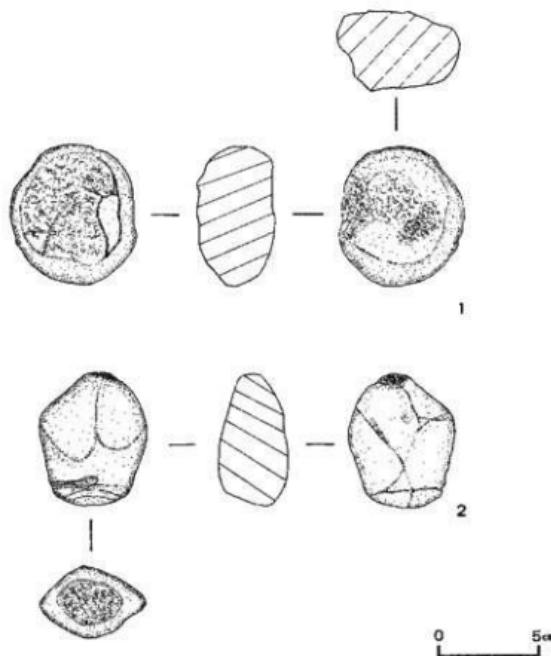
石製品（第16図）

1は磨石である。両面ともほとんどの部分が欠けているが、一部に使用痕が残っている。

2は敲石で、握り部は光沢を持ち、底部には使用痕が残っている。また、握り部と底部との境界部に亀裂が入っている。

これらの石器は出土状況から見て縄文時代のものと推定される。

（藤川睦弘）



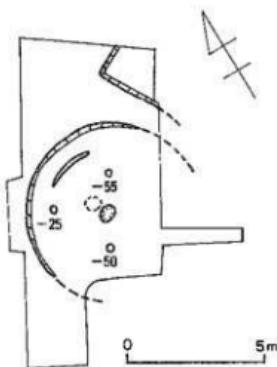
第16図 石製品実測図

IV. まとめ

今回の呂智郡瑞穂町における長尾原遺跡発掘調査は、個人住宅建設に係る宅地造成部分の限られた面積であり、長尾原遺跡の全容を明らかにすることはできなかつたが、調査地から北側の段丘端部にかけてはかなりの遺構が良好に遺存していると推定された。調査の結果、瑞穂町では検出例の少ない弥生時代中期の竪穴住居跡や、石見地方で二例目の馬形土製品の出土など、当地方の古代史を考える上で貴重な資料を検出することができた。以下、調査によって得られた成果の概略についてまとめておきたい。

1. 竪穴住居について

調査区南端で1棟検出された。南側半分は農耕用土採取のため破壊されていたが、復元直径は約6.0mの円形住居跡と推定され、当地方における竪穴住居としては比較的大型の住居と言える。また、出土遺物から本住居跡は弥生時代中期後半と推定される。瑞穂町でも近年、社会資本の整備や、大規模開発とともに事前に発掘調査が実施されているが、検出される遺構は弥生時代後期以降のものが大半で、今日までに弥生時代中期の住居跡の検出例は、本遺跡より約3km南西に位置するゴルフ場建設予定地内大金谷⁽¹⁾遺跡と本調査区の北50mで1975年（昭和50年）に住宅建設に伴う発掘調査で検出された2例のみである。出土遺物から前者は弥生時代中期前半、後者は今回の調査で検出の住居跡と同じく弥生時代中期後半と推定される。後者は長尾原遺跡に属しているが、「道城住居址」としてその概要が報告されている。大きさは、遺構は直径6.0mで平面形は円形を呈し、床面中央部に長径80cm、深さ25cmのピットがあり、その横に赤褐色を呈した堅い焼土が検出されている。柱穴は3ヶ所確認されており、それぞれ床面からは55cm、25cm、50cmの深さがある。⁽²⁾これを今回検出した住居跡と比較すると、それぞれの平面形、復元直径はほとんど同じで、中央ピットの



第17図 道城住居址実測図

形状、大きさもほぼ同じである。また、柱穴と思われるピットの床面からの根入も同程度であり、双方は住居の形態として同じ傾向にあると思われる。ただこの比較により当地方における弥生時代中期後半の住居の形態を位置付けるにはあまりにも資料が希薄であるが、住居の傾向性を考える一資料としては貴重なものとなった。

2. 馬形土製品（陶馬）について

古墳時代の封土やその他の遺跡から発見される馬形の土製品には、須恵質の陶馬と土師質の土馬がある。土馬の方が陶馬より小さい物が多く、表現も簡略であると言われている。また、粘土を貼付て鞍、障泥、鐙を表し、刻線で面繫、手綱、尻繫を示した入念なものもある。⁽⁴⁾長尾原遺跡から出土した須恵質の馬形土製品もそうした例である。

馬形土製品は、その形態から馬具をつけた飾馬とつけていない裸馬に分類され、⁽⁵⁾本例は前者の飾馬に分類される。

鳥根県内の出土は、松江市の薦沢A、B遺跡の38点を最高に答見するかぎりでは出土総数は90点で、その内石見部での出土例は、益田市の本片子遺跡と長尾原遺跡出土の陶馬各1点のみで、圧倒的に出雲部の出土例が多い。また隣接する広島県北部では中国縦貫道路建設工事に先立って調査された高田郡高宮町の矢賀追第2窯跡周辺で出土した陶馬1点のみで、当地域周辺は馬形土製品の出土例の少ない地域と言える。

さて、本遺跡出土の陶馬は、前述したように現存長13.9cm、残存高8.9cmで、尾部と一方の耳、前脚1本を残し3本の脚を欠損しているが、全体的に馬の特徴や馬具を良く表現している。鞍、面繫、手綱はヘラ状工具により陰刻され、鞍の前輪と同様後輪も粘土を貼付て表現していたと思われるが剥離により欠損しており、剥離痕から後輪は斜め後に傾斜していたと思われる。顔面には日と鼻以外に2ヶ所穴を穿っているのが認められるが、何を表現しているのかは不明である。

また、陶馬の左側は全体的に自然釉により緑黄色を呈しており、横に倒して焼成されたことがうかがえる。

a. 長尾原出土陶馬の年代観

造構や共伴する遺物が検出されなかつたので決め手になるものはないが、先学者の研究や発掘事例を参考に推定してみたい。

小笠原好彦氏は、「土馬考」の中で形式変遷を2段階10形式分類され、段階別に製作年代を示された。

〈第1段階〉馬具を表現する段階で、粘土紐を貼付するものと沈線によって描くものがある。顔面、頭部も細やかに表現され、一般に大型で丁寧な作りの物が多い。A～C形式の三つに細分される。【A形式】馬具を粘土紐のみで表すも7世紀後半およびそれ以前の年代。【B形式】粘土紐と沈線を併用して馬具を表現するもので7世紀後半。【C形式】馬具の表現が粘土を貼りつけた鞍に限られるもので8世紀前半。

〈第2段階〉馬具が省略され裸馬の段階のもので、顔面の表現も簡略化され、同時に小型化の過程をたどるもので、7世紀前半から10世紀前半とされD～J形式の七つに細分化される。

また、松江市の薙沢A、B遺跡、別所遺跡では大量に出土した土馬の形態を4式に分類されている。

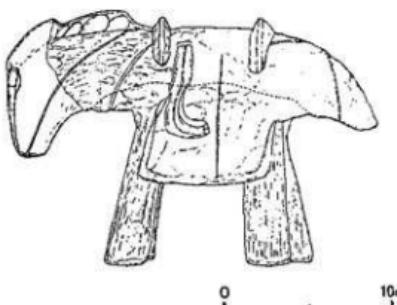
〈I式〉大型のもので推定全長20cm内外で胸部の長さ12～13cmのもので出土須恵器より山陰須恵器III期、高広編年ⅠA期に属し実年代は6世紀後半に比定。

〈II式〉中型のもので胸部の長さ8cm～11cm、検出した住居跡の時期から実年代を6世紀末～7世紀前半に比定。

〈III式〉II式を一回り小型化したもので、胸部の長さ6～7cm、住居跡の時代やII式との関連から7世紀前半以降。

〈IV式〉III式を更に小型化したもので、胸部の長さ3.5～5.5cmで9世紀代までの時期にそれぞれ分類されている。

長尾原遺跡出土の陶馬は粘土紐と沈線により馬具を表現した飾馬で、推定全長15cm前後、胸部の長さは6.5cm前



第18図 美保神社境内遺跡出土土馬

後（前脚～後脚）であり、小笠原氏の分類によると第1段階B形式に相当し、薦沢A、B遺跡、別所遺跡の分類によるとIII式に相当するものと思われる。実年代もそれぞれ7世紀後半、7世紀前半以降に比定される。

また、島根県で最も古い部類に属す美保神社境内遺跡出土の土師質の土馬は全長21cm、高さ15cmと大型で、6世紀後半のものとされている。¹²鞍の面輪、後輪は直立て埴輪馬を連想させる。長尾原遺跡出土陶馬の鞍の後輪は剥離痕から後方へ傾斜していると推定され、美保神社の土馬より鞍の表現も新しい様相を示していると思われる。以上のことから、長尾原出土陶馬の年代は7世紀代前半以降と推定しておきたい。¹³

b. 長尾原遺跡出土陶馬の性格について

馬形土製品については古代都城の井戸や溝から多く出土することから從来より、水靈祭祀、雨乞祭祀等水にかかわる祭祀遺物との見かたが有力である。一方疫病の流行に当たっては馬形代を奉獻し、行疫神の乗り物である馬の脚や体軀を破壊することで、その行動の自由を奪い、事前に行疫神の猛威を防いだとする説もある。¹⁴

また、民俗例では「虫送りの馬」や才の神信仰につながると言われている。例えば瑞穂町に隣接する石見町矢上の鹿子原地区に古くより伝わる「実盛さん」と称される虫送りの行事は、等身大の「実盛さん」という騎乗姿の藁人形を中心に据え、笛、鉦に合わせて「実盛様を送ったならば菜虫、糞虫について行く」などと唱えながら踊り、最後は氏神の社で人形を焼き虫送りは終了というものであるが、以前は地区境で人形を焼き川に流していたという。¹⁵

さて、長尾原遺跡の陶馬であるが、水にかかわる祭祀遺物、又は行疫神の厄災を封じるためのもの、虫送りの馬や才の神信仰いずれに關係するものであろうか。前述したように本陶馬は三本の脚と耳、尾部を欠損した状態で出土した。陶馬に伴う造構は確認されていないが、出土状況から察するに意図的に投棄された感じを受けた。また、調査区内からは欠損部分の出土は無く、他所で破壊したのち、出土地点付近に投棄（遺物に二次的移動による磨滅が認められない）したのではないかと思われる。

出土地点は広大な長尾原遺跡の東端縁辺部にあたり、谷（現在は圃場に整備され



石見町鹿子原虫送り（参考資料：石見町役場企画課）

（04・23）

ている)を挟んで若林遺跡、淀原遺跡が続いている。推定であるが、集落境かそれに近い場所ではないかと思われる。また今回の調査や1975年に調査された『道城住居址』の調査においても水にかかる構造は検出されておらず、水にかかる遺物とは言い難い。限られた面積の調査でありかつ乏しい資料からの推論であるが、長尾原遺跡出土の陶馬は、水にかかる祭祀遺物というより、流行病等の行疫神の封じ込めや才の神信仰または後世の虫送りの馬に通ずる祭祀遺物と考えられる。

おわりに

今回の調査は、面積的にも非常に限られた狭い範囲の調査であったが、当地方では検出例の少ない弥生時代中期の住居跡や遺物など、弥生時代中期の集落を考える上で貴重な資料を得ることができた。また、石見部で2例目の出土となった陶馬は、それに伴う構造や年代決定の遺物は検出できなかったが、古代都城あたりで盛んに行われた祭祀が、石見の山間部でも行われ、中央の文化や風習が地方まで浸透していたことを示すものである。古代の祭祀を考える上で貴重な資料となろう。

(森岡弘典)

注

- (1)ゴルフ場建設予定地内現在調査中。
- (2)吉川正、今岡稔『瑞穂町長尾原F区道城住居址調査報告』(瑞穂町教育委員会 1975年)。
- (3)(2)に同じ。
- (4)水野清一、小林行雄『國解考古学辞典』(東京刷元社刊 1959年)。
- (5)大場繁雄『土馬形遺物について』(『考古学雑誌』27巻 第4号 1937年)。
- (6)『舊沢A遺跡、藍沢B遺跡、別所遺跡発掘調査報告書』(松江市教育委員会 1988年)。
- (7)『本片子遺跡、木原古墳発掘調査報告書』(益田市教育委員会 1982年)。
- (8)『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』(広島県教育委員会 1979年)。
- (9)小笠原好彦『土馬考』『物質文化』(25号、物質文化研究会 1975年)。
- (10)(6)に同じ。
- (11)『美保関町誌』(美保関町 1986年)。
- (12)内田律雄、広江耕史『土馬の道』(鳥取県文化財愛護協会『季刊文化財』第40号 1980年)。
- (13)金子裕之編『律令期祭祀遺物集成』(律令祭祀研究会 1988年)。
- (14)水野正好『招福・除災—その考古学—』(国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985年)。
- (15)(3)に同じ。
- (16)土井久夫氏(鹿子原虫送り踊り保存会)より虫送りに併せ疫病の放逐を願って行われたのが起源ではないかとのご教示を得た。
- (17)白石昭臣『江の川流域の民俗と伝承』(1988年)。

図版 1



a. 長尾原遺跡遠景（東より）



b. 同 近景（南より）

図版 2



a. 長尾原遺跡土層断面（西より 1）



b. 同 (西より 2)

図版 3



a. 長尾原遺跡土層断面（南より 1）



b. 同 (南より 2)

図版 4



a. S I 01検出状況（北西より）



b. 同遺物出土状況（北西より）

図版 5



a. S I 01 (北西より)

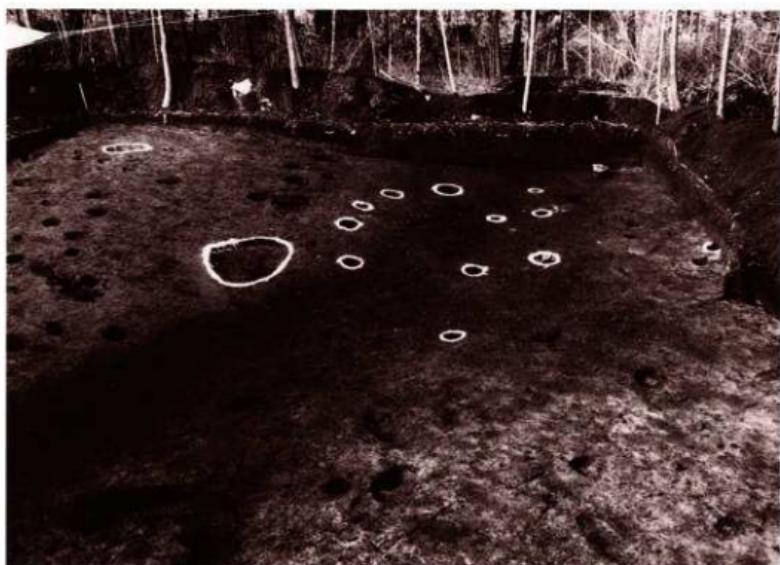


b. S K01 (南より)

図版 6

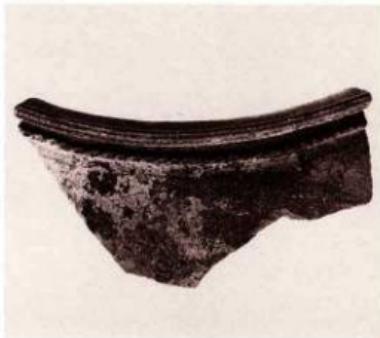


a. SK02 (東より)

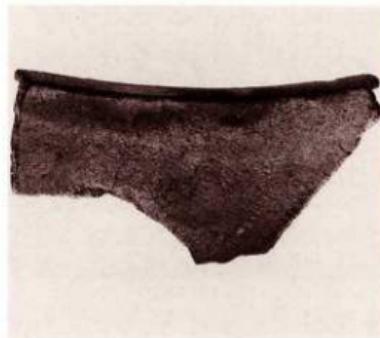


b. ピット (南より)

圖版 7



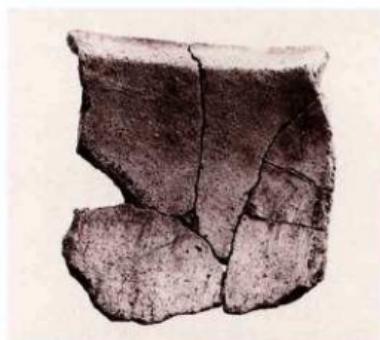
弥生土器



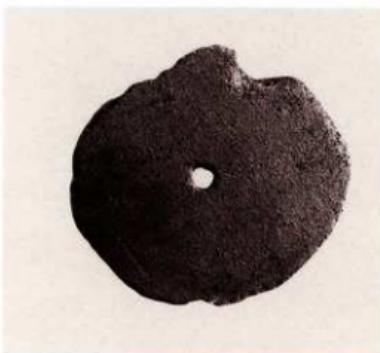
同



弥生土器



同



紡錘車



同

S I 01出土遺物

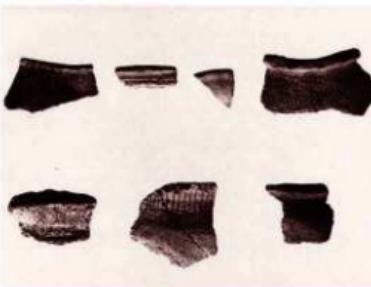
図版 8



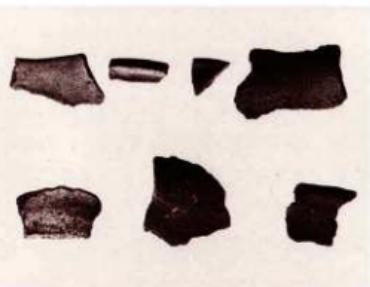
縄文土器



同



弥生土器



同



弥生土器



須恵器



土師質土器

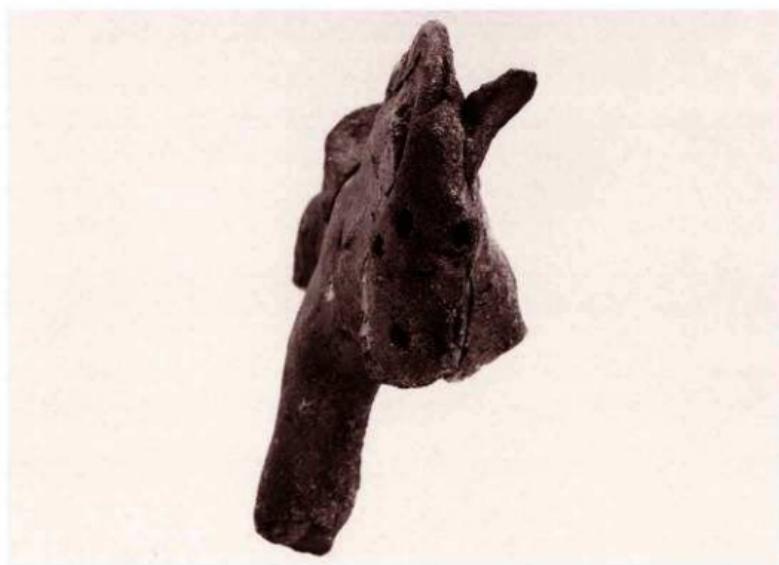


石器

包含層出土遺物



a. 馬形土製品（陶馬）出土状況



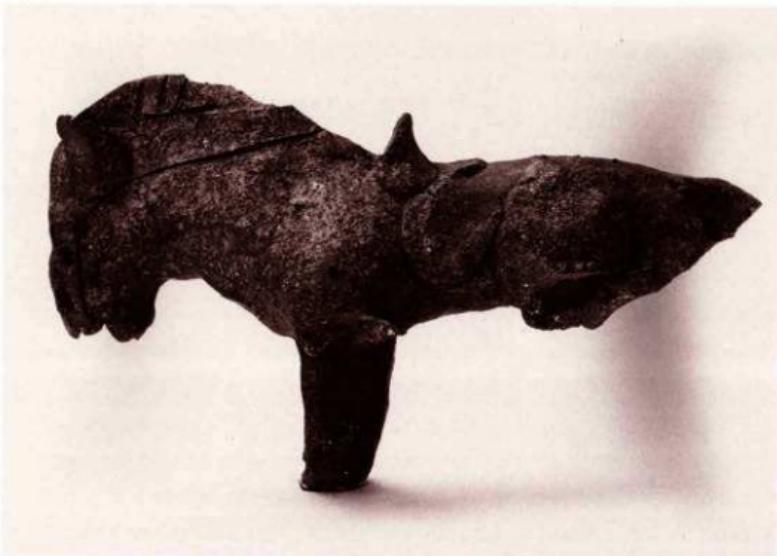
b. 同 (前面)



a. 馬形土製品（陶馬）（上面）



b. 同 (後面)



a. 馬形土製品（陶馬）（左側面）



b. 同 (右側面)



a. 馬形土製品（陶馬）（左頸部）



b. 同 (右頸部)

図版 13



a. 馬形土製品（陶馬）（鞍部）



b. 発掘調査状況

報告書抄録

ふりがな	なごおばかせはくつちほくじ						
書名	長尾原遺跡発掘調査報告書Ⅰ						
副書名	住宅建設用地造成に伴う発掘調査						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	森岡弘典 藤田睦弘						
編集機関	瑞穂町教育委員会						
所在地	〒696-03 島根県邑智郡瑞穂町大字三日市32番地				TEL08558-3-1128		
発行年月日	西暦 1994年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡番号					
長尾原遺跡	島根県邑智郡瑞穂町 大字流原	32445	34度 50分 58秒	132度 32分 02秒	1993.10.01~ 1993.10.31	200	住宅建設用 地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
長尾原遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 土坑 ピット	1棟 2基 12個	縄文土器、弥生土器 須恵器、土師質土器 馬形土製品(陶馬) 石製品	弥生時代中期の竪穴住 居跡を検出	
						遺物包含層から馬形土 製品(陶馬)が出土	

平成 6 年(1994) 3 月

鳥根県邑智郡瑞穂町
長尾原遺跡発掘調査報告書 I
住宅建設用地造成工事に伴う発掘調査

編集・発行 鳥根県邑智郡瑞穂町教育委員会
印 刷 柏 村 印 刷 株 式 会 社